

「エン・クリスト」29 号

愛のすがた (講演要旨)

1987年1月発行

人が人である限り、誰しも渴き求めているのは「愛」であろう。まことの宗教の根底は「愛」だと思う。人間には、肉親の愛、師弟の愛、友情や恋愛における愛など、さまざまな相の愛があるが、私達はイエス・キリストという方にぶつかって初めて、ほんとうの愛の何たるかを知った。もしキリストの「愛のすがた」を描き出そうとするならば、朝から晩まで語りつづけても語り尽くせないだろう。旧約聖書では義の角度が強いが、キリストはその中から父神の愛を引き出された。その愛を体に浴びてその中に生きておられたから。我々は新約の光、キリストの光で読めば旧約の愛も受けとれるが、何といっても、まばゆいばかりに愛が輝いているのは新約聖書だ。で、今日はそこから一、二をとり出して味わいつつ真の愛に触れたいと思う。まず、ルカ伝10章の「良きサマリヤ人」の譬え話から。あるとき、イエスは、ユダヤ教の教法師（律法学者）との問答の中で、永遠の生命への道は隣人愛だよ、愛の理論ではなく、愛の実践だよ、と教えられた。そこで教法師は、

「では一体、隣人とは誰のことですか」

と尋ねた。イエスはこれに対して譬え話をもつて答えられた。

「或る人がエルサレムよりエリコに下る途中、強盗に襲われた。強盗どもは彼の衣を剥ぎ傷を負わせ、半死半生にして棄て去った。たまたまそこへ通りかかった或る祭司は、見て見ぬふりをして彼方を通り過ぎてしまった。次に通りかかったレビ人（イスラエル十二部族の中で神に仕える使命を負った族）もまた、知らぬ顔で遠くを通り過ぎてしまった。ところが、三番目に通りかかった或るサマリヤ人は、この傷つき倒れている人のところに近づいて来て、彼を見て憫れみ、彼の体に油と葡萄酒とを注ぎ、傷を包んで自分の家畜に乗せ、旅館に連れてきて介抱してやった。一緒に泊ったその翌日、旅立つにあたって宿の主人に金子を与え、旅の所用を終えて帰ってくるまでこの傷ついた人のことをよろしく頼むと、後事を主人に托して旅立って行った。」

イエスは教法師にきかれた。

「この三人のうち、誰が強盗に襲われた人の隣人となったか」

と。彼曰く、

「もちろん三番目の憐み深い行為をした人です」

と。イエスは言われた



「^{あなた}貴方も行って同じようにしなさい」

私はこの物語りの中にイエスの心がよく現われていると思う。サマリヤ人は、宗教的な理由でユダヤ人から軽蔑され、両者の間には交際がない状態だったが、この物語りのサマリヤ人は、無色透明の心をもっている。そこに傷つき倒れ助けを求めている人がいるならば、放つてはおけない。たまらず駆け寄って懇ろに介抱した。これこそが本当の人間らしい姿である。倒れている人を見たとき、あれは敵か味方か、どんな宗教か、自分の宗旨に合う人かどうか、といった先人観で人を見ない。このサマリヤ人においては、宗教だとか思想だとか世界観だとかのレッテルは少しもついていない。キリストもおつしやった。

「天の父は善き者にも悪しき者にもひとしく陽を昇らせ、正しき者にも正しからざる者にも同じく雨を降らせ給う。汝ら天の父の^{まつた}全きが如く全かれ！」

と。凡そ宗教の世界ほど人を差別するものはない。自分の宗派に合う者は大切にする。合わない者は白眼視する。裁く。少し教義が違えば反目し合う。宗教ほど、人を救うことを目的としながら、人を苦しめるものはない。己れを苦しめ家族を裁き、その他いろんなことが宗教の名において為される。キリストの時代もそうだった。キリストは本当に幼な児^ごのようだった。神を父と呼び、幼な児を愛された。

「^{おきなご}幼児の様に神様を受けとる者でなければ天国に入れない」

と。幼な児には国境がない。幼な児は遊ぶ時は無心に遊ぶ。悲しい時は大声で泣く。あの天心爛漫^{らんまん}な幼な児の姿。それが実はキリスト御自身の姿であった。教法師は

「二体、隣人とは誰か」

と傍観者のにたずねているが、サマリヤ人は、傷つき倒れている人に近づいて行って自らその「隣人となつた」のである。我々も、人が苦しんでいるときに声をかけ、何も出来なくてもその痛みを自分の痛みとして分かち合つて、キリストに祈る。これが隣人としての姿であろう。物語りの葡萄酒はキリストの贖罪の血を暗示し、油は聖霊なる油、生命^{いのち}なる聖霊を示している（小池辰雄著『無者キリスト』236頁）。

次に、ヨハネ伝 8 章の「地にも書き給うイエス」（『無者キリスト』163 頁以下）のところ。夜明け方、姦淫の現場に踏み込まれ、イエスの前に突き出された一人の女を、イエスが深き愛と憐み^{あわれ}をもつてかばわれた感動的場面である。己れを義^{ただ}しと自負する者は人を裁く。そのようなパリサイ根性をこそイエスは唾棄^{たき}すべきものとされた。

「罪なき者まず石を投げ打て」

と言いつ放たれたイエスは、女をも、打たんとする輩^{やから}をも見ておられない。一人また一人と老人をはじめ次々と立ち去っていった。女だけが残った。

「我も汝を罪せじ。再び罪を犯すな」

とゆるしの言をもつてイエスは女を帰された。イエスは、罪業をどうでもいいとは言っておられない。しかし、人の弱さを知り給うイエスは、自ら裁き給わないばかりでなく、人



の罪を背負い、その受くべき裁きを自らの上に引き受けようとされたのである。その愛の極致が十字架であった。これこそ主イエスの「極みなき愛のすがた」である。このキリストの姿を思い浮かべるとき、私はもう何も言えなくなる。キリストを信受して30年になる私だが、いよいよキリストの臨在が濃厚に感じられる。このキリストにいだかれ、このお方と一緒に在るならば、そこが私の天国である。キリストという無限無量の愛の実体、これをわがうちに宿して、同質の愛のすがたに化せられてこの地上を生きることこそが、われらの生命であり、尽きざる喜びとなろう。



「エン・クリスト」30号

箱根特別集会の感動

1987年9月23日（箱根高原ホテル）

今回は芦の湖畔の箱根高原ホテルを会場として、静かなまことに恵まれた自然環境の中の三日間の特別集会であった。戸外は、そこかしこに森林や草原があり、祈りに、散策に格好の場所である。集会はといえば、小池先生の講筵内容は第1回目から早くも最高潮に達していた。それも無理はない。今回の講筵の主題はマタイ伝であり、かの「山上の告白」（山上の垂訓）の第一句

「恵福^{さいわい}なるかな霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

から始まったのだから。この聖句こそ、先生が、今から36、37年前に、「聖書の扉を開く鍵」として把握^{はあく}せしめられ、これにより福音の神髄を体得されたという歴史的意義をになう箇所なのだ。それ以来先生は、この箇所を幾度となく語ってこられた。しかし語られる度ごとに、いつも先生はその根源現実の中へ身を投げ入れて語り出される。主の十字架で我らの自我が、我という罪が全く贖いとられ、無「私」、無「我」、無「罪」なる根源現実を絶対恩寵^{たまわ}として賜^{たまわ}っているのだと、そのような恩恵の事態の中に深く身を投げ入れてその中から語り出される度に、間髪を入れず先生の口から異言が迸り出るのである。

「あなたがたはこの絶対恩寵の事態が有難くないのですか」

「まだ何か問題があるのですか」

「ほんとうにその中へ全存在をぶち込んで祈ってますか」

と問いかけ、われらの魂に迫ってこられる。この先生の全存在的な「投げ入れ」と「受け取り」とを我らもこの身で確^{しか}と受けとめ体得しえたならば、それだけで特別集会の目的は達せられたというべきである。

「恵福なるかな」で始まる山上の八つの祝福を先生は花の姿に托しつつ語られたが、それは先生の9月1日作詞の「恵福なるぞ」の讃歌に見事に結実した。

次に私の心に今もなお鮮かに、感動として残っているのは、第2日の午後の天野暁子さんの感話（証言）である。天野さんは全盲であられる。現在、甲府の盲学校の先生をなさっている。先年、最愛の御夫君を天に送られた。その天野さんが、澄んだよく透るまろやかなお声で朗々と、この夏の旅の体験を話された。彼女は自然が大好きだという。自然に恋しているという。そしてこの夏、聖高原^{ひじり}と軽井沢のこせの温泉に、更には房総の海へと全く一人で旅をした。その折々に詠^よまれたという歌がまた素晴らしかった。

〔聖高原にて〕



○朝露に濡れそぼちつつ高原を 秋の花の名かぞえつつ往く
○牧水の歌碑に向かへば そこはかとなき寂しさに涙さしくる
〔こせの温泉にて〕

○瀧つ瀬と山鳥の音を聴きながら たどたどしくも歩む沢ぎし
○地底より慈愛のごとく湧き溢る こせの出で湯に痛み鎮めん
こうして山で安らぎを得た彼女は、次には海へ行きたいとの衝動に駆られた。

○海は呼ぶ 祈るがごとく高鳴りて 明けの松原馳せても来よと

〔蓮沼海岸にて〕

○我ついにここに来たりき房総の海と陸とのいどみあふとこ

○砂と大気と我と融け合ひて房総の朝を庭とし遊ぶ

○おお父よ いかなればかくも恵み給ふ この大海を庭とし生きよとは

この歌に来て、私はもう涙をこらえることができなかった。何という天国的な魂の人なのだろう！ 彼女は次のような言葉で結ばれた。

「盲目の私に、主人を失った私に、悲しみが深いことによつて主はこんなにも恵んで下さったのです。闇の中に光は輝いていて、その闇は決して光に勝ちませんでした。アーメン、ハレルヤです！」

と。まことに

「恵福なるかな……」

と呼びかけ給うキリストは、天野さんをかくも力強く捉え、悲しみにかえて歓喜の油を与え、讃美の衣を着せて下さっているのである。主が目から涙を拭い給うという黙示録の約束が既にここに現じているのである。

感動といえましょう一つ。京都から初参加した一姉妹が、第2日日の夕刻、以前から病んでいた胆石の痛みを訴えた。私は直ちに小池先生に報告し、御加禱をお願いした。先生は彼女の腹部に按手して、深く、長く、全存在的な棄身の祈りをして下さった。キリストの御力が彼女の患部に、そして全身に浸透するように、波状的に、呻くが如くに祈って下さった。私は傍で先生の祈りに呼応するように合掌して祈っていたが、先生の祈りのお姿は正に感動的であった。これこそが先生の真骨頂である。彼女はそれ以来、今日まで胆石の痛みは消火しているという。

最後に、この特別集会のために労して下さい下さった東京キリスト召団の兄弟方に心からお礼申し上げます。



「エン・クリスト」第 30 号 創世記 (第 3 回) ノアの洪水

1987 年 4 月発行

今回は創世記第 6 章～第 9 章のノアの物語である。ノアはアダムから数えて第十代目の子孫である。ノアの時代に世は

「神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」(創 6・11)

「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、『わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、^はこのものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる』と言われた。しかし、ノアは主の前に恵みを得た。……ノアはその時代の人々の中で^{ただ}義しく、かつ全^{まった}き人であった。ノアは神とともに歩んだ」(創 6・5～9)

神はノアに、いとすぎの木で箱舟を作るように命じられた。ノアとその家族たち、およびあらゆる生き物の雄と雌の一つがいづつがそれに入り、洪水をまぬがれるためである。箱舟の長さは約 132 メートル、幅約 22 メートル、高さ約 13 メートルで三階建てという巨大な舟である(同じ大きさの近代船なら 1 万 5 千トン級)。

「ノアはすべて神の命じられたようにした」(創 6・23)

遂に箱舟は完成した。神の命令どおりノアの家族と動物たちが箱舟に入った。それから 7 日後、神の予告どおり雨が降り始めた。2 月 17 日のことである。雨は 40 日 40 夜降り続き、大洪水となった。山々さえも水におおわれ、箱舟は水のおもてに漂った。地の生き物は、人も動物もみな死に絶えた。水は 150 日の間、地上にみなぎった。やがて水は引きはじめたが、地表がすっかり乾いたのは、翌年の 2 月 27 日のことであった。ノアは神の言に従って家畜やその他の動物たちと共に箱舟を出て地に降り立った。一年ぶりになつかしい土を踏みしめたノアは、まず主に祭壇を築いて燔^{はんさい}祭を捧げた。主は心に言われた、

「わたしはもはや二度と人のゆえに地をのろわない。人が心に思い^は図ることとは、幼い時から悪いからである。わたしは、このたびしたように、もう二度と、すべての生きたものを滅ぼさない」(創 8・21)

そして神はノアとその子らを祝福して契約を立てられた。

「わたしはあなたがた及びあなたがたの後の子孫と契約を立てる。またあなたがたと共にいるすべての生き物……と契約を立てよう。……この契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅



「ぼす洪水は、再び起こらないであろう」(創 9・9～11)

さらに神は言われた。

「わたしは雲の中に虹を置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。

……虹が雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、……永遠の契約を思い

おこす」(創 9・13～16)

ところで、ノアの義しさとは、神の言に従い、神の聖意を行ずるという信従の相にある。箱舟の製作がそれを物語っている。神の命を受けたノアは、直ちに箱舟の製作にとりかかり、来る日も来る日もその仕事に打ち込んだ。世の人々はノアの行為に驚き怪しみ、なぜそんなことをするのか理由をたずねたことだろう。ノアから神の審判の告知を聞き、もし悔い改めた者がいたなら、神はきつとその人を箱舟の中へ招き入れられたにちがいない(ペテロ前書 3・20 参照)。しかし人々はノアの言葉を信ぜず、ノアを嘲笑するのみであった。預言者、即ち神の言を預かり託されたる者は、いつの時代も世に容れられず、孤独である。しかし、最後の審判の時には

「父の御国にて太陽のごとく輝く」(マタイ 13・43)

のである。

洪水の後、神は今後再び洪水を起こすことはしないと心に誓い、ノアと生き物たちに対して契約を立てられたのであるが、それは、人が善に変貌するからではなく、ただ神の忍耐による。

「人が心に思い図ることは、幼い時から悪い」

が故に、もし人の不義に対して、その度に義の審判を下すとすれば、遂には人類は絶滅してしまうであろう。審判によつては人の性^{さが}は変革され得ないのである。かえつて

「憐憫^{あわれみ}は審判に打ち勝つ」(ヤコブ 2・13)

のである。虹は神の立てたまひし契約のしるしであり、希望である。神と人との和合のしるし、天と地との架け橋である。だが、この希望の虹の内実は、キリストによつてはじめて成就される。主キリストこそは天と地とを結ぶまことの架け橋であり、父神への道であり、真理であり、生命なのである。ご自身の身をもつて我らの不義を負い給い、その砕かれ給いしによつて罪の贖い^{あがな}を完了し給い、聖霊なるまことの生命を賜^{たまわ}つて、我らを義愛一如、愛信一如の新生命へと新しく創造し給うた救い主なのである。



「エン・クリスト」第 31 号 創世記 (第 4 回) アブラハムの生涯 (1)

1987 年 7 月発行

今回から、イスラエル民族の父祖アブラハムの信仰の生涯を学ぶことにしよう。創世記では第 11 章 27 節から第 25 章にかけてアブラハムの生涯が語られている。読者は、何よりもまず、自分の目でこの創世記の記事を読んでいただきたい。今回、私は、第 15 章までの記事の中から、アブラハムがどのようにして主エホバに出会い、その御声に従って行ったのかに焦点をあてて、彼の歩みをたどってみたいと思う。

アブラハムはカルデヤのウルの生れ、最初は名をアブラムと言った。妻の名はサライ、彼女はうまずめであって二人の間には子がなかった。アブラムの父テラは、アブラムとその妻サライ、アブラムの弟ハランの子ロトらを連れて、住みなれたウルを出た（ロトの父ハランは既に世を去っていた）。目的地はカナンであったが、途中のハラン（カランともいう。ウルの北西約 900 キロメートルの地）に定住し、そこで 145 歳の生涯を終えた。時にアブラムはもう 75 歳に達していた。父の死後、主はアブラムに言われた。

「汝の国を出で、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて、我が汝に示さん其の地に至れ。我、汝を大なる国民と成し、汝を恵み、汝の名を大ならしめん。
汝は恵福の基となるべし。」

我は汝を祝する者を祝し、汝を誼う者を誼わん。天下の諸々の宗族、汝によりて恵福を獲ん」

と。これが、主がアブラムに語られた最初の著しい言葉である。既に 75 歳になっていたアブラムである。愛する父を喪い、自分には子がなく、寂しきの中に日々を送っていたであろう失意のアブラムに全く思いがけない主の言葉がのぞんだのだ。

「お前を大なる国民となし、お前を恵み、お前の名を大ならしめよう」

「お前は恵福の基となる」

「お前の民族だけではない。天下の諸々の民族はお前によって恵福を受けるのだ」

と。全く途方もなく大きな約束である。驚くべき内容の言葉である。この主の言葉は、彼のそれまでの生涯をくつがえし、全く新しい事態の展開を予告する励しの言葉、主の力ある命令であった。新しい人生へと旅立たしめ押し出す主の圧倒的な迫りであった。

ペテロが主イエスに従ったときもそうだった。

「深みに乗りいだし、網を下して漁れ」



とのペテロの意表を突く主の御言葉に、一瞬わが耳を疑ったであろうペテロは、

「君よ、われら終夜^{よもすがら}労したるに、何をも得ざりき、されど御言^{したが}に随いて網を

下さん」

と、断然、御言葉にしたがった。結果は思いがけない大漁だった。ペテロはイエスのひざもとに平れ伏してしまった。

人と主との出会いはかくの如きものである。「信ずる」とは、人間の側であれこれ思索をめぐらした末に「信じよう」と決心するが如きものではない。神の側からの圧倒的な恩恵^{めぐみ}の迫りに圧倒されて、信じ従わないではいられないようにされる恩恵の事態である。その意味で、正に

「神の業^{わざ}」(ヨハネ 6・29)

である。しかも、それは大方の場合、人が失意の中にあるとき、または大いなる苦難の中に呻吟^{しんげん}しているときにのぞんで来るものである。

さて、アブラムは主の言葉にしたがってハランを旅立った。妻サライ、おいのロト、ハラんで得た人達や沢山の家畜をたずさえて、カナンの地へと出で立った。カナンに着いたアブラムに主は現われて言われた、

「我、汝の子孫にこの地を与えん」

と。彼はその処で、自分に現われて下さった主のために祭壇を築いた。彼はそこからペテルの東の山に移ったが、そこでも祭壇を築いて主の御名を呼んでいる。実に彼は、行く先々で主に祭壇を築き主を拝している。「神第一」が彼の生活の基本であった。

カナンでのアブラムの生活は平坦なものではなかった。ネゲブでは、その地にききんがあつたので、彼は一時、エジプトに下つている(12・10～20)。エジプトを出て再びネゲブに上ったとき、アブラムはロトと別れることになる。発端はアブラムの家畜の牧者たちとロトの家畜の牧者たちとの争いであつた。両者が共存するにはネゲブの地は十分ではなかった。アブラムはロトに言つた。

「骨肉の間で争うのはよそう。全地はあなたの前にある。あなたが欲する地を

選^えびとりなさい」

と。この言葉の中に、争いを好まず、おいに対しても謙譲なアブラムの人柄がよく表われている。ロトは、よく潤^{うるお}ったヨルダンの低地をことごとく選^えびとつて東に移り、ソドムに居を定めた。アブラムはカナンの地に住んだ。時に、主はアブラムに言われた。

「汝の目をあげて、汝の居る所より西東北南をのぞめ。凡そ汝が観^みるところの

地は、我れ、これを永く汝と汝の子孫に与うべし。我、汝の子孫を砂のごとく^たなさん。もし人、砂を数うることを得ば、汝の子孫も数えらるべし。汝、

起^たちて縦横に其の地を行き巡るべし。我これを汝に与えん」

と。この世の富に関してアブラムはロトに譲つた。ロトの欲するところをすべてロトに取



らせた。これは、主を信じ、主を第一とするアブラムにとっては、自然な選択であったであろう。このアブラムに対して、主の祝福の言葉が臨んだのである。

「見渡すかぎりの地はお前とお前の子孫のものだ。お前の子孫は砂のように増えひろがるのだよ」

と。これまた驚くべき宣言である。子宝に恵まれぬアブラムに向かって、それにもかかわらず主は、子孫の繁栄を約束されるのである。

一方、アブラムに別れてソドムに定住したロトは、その地方で起こった諸王の戦争に巻き込まれて捕虜となる。すなわち、エラムの王ケダラオメルとその連合軍（四王）対ソドムの王らの連合軍（五王）との戦いにおいて、ソドムの王らが敗れ、ロトとその一族は捕虜として連れて行かれた。これを伝え聞いたアブラムは、精鋭 318 人を率いて敵軍を襲撃し、ロト一族とその財産（家畜）をことごとく奪還して、ソドムの王の歓迎を受け、また、サレムの王で、いと高き神の祭司メルキゼデクの祝福にあずかる（14・19）。

こうした出来事の後、主の言葉が異象のうちにアブラムに臨んだ（第 15 章）。曰く。

「アブラムよ、恐るるなかれ。我は汝の盾なり、汝の賜物（受ける報い）は甚だ大なるべし」

と。以前にも主は、

「お前の子孫は砂のように増えひろがる」

と祝福の言を語って下さった。今また、

「お前の賜物は甚だ大きいぞ」

と言われる。いまだに子宝に恵まれぬ自分に主は何をくださろうとされるのだろう。アブラムは率直にその胸中を打ち明けた。

「主なる神よ、わたしには子がなく、わたしの家を継ぐ者はダマスコのエリエゼルであるのに、あなたはわたしに何をくださろうとするのですか」

また言った。

「あなたはわたしに子を賜らないではありませんか」

と。このアブラムの嘆きを打ち消すように、この時、主の言葉が彼に臨んだ。

「この者（エリエゼル）はお前のあとつぎとなるべきではない。お前の身から出る者があとつぎとなるべきである」

と。そして主は彼を外に連れ出して言われた。

「天を望みて星を数え得るかを見よ、汝の子孫はかくの如くなるべし」

と。この断然たる言葉に、アブラムはもはや平伏しのほかなかった。これまでも度々主は語られた。恵み深き予言であった。しかし、この度は、一段と力強く、アブラムの全存在を包むが如く、主の恩恵が彼を圧倒した。この時、アブラムは全存在で

「アーメン！」



と叫んだ。主は、これを彼の「義」と認められた (15・6)。

「アブラム、主を信ず、主 (エホバ) これを彼の義となしたまえり」

との有名なこの箇所は、いわゆる「信仰による義」のよりどころとしてパウロの 로마書において引用されるところである (ロマ書 4 章)。ヘブル書もいう

「信仰なくしては神に喜ばれることができない」 (ヘブル 11・6)

と。そして人々は「信仰」の必要性を力説する。しかし、「信仰」とは先にも述べたように、神の恩恵が圧倒している事態である。その恩恵が恩恵として受けとられている事態をいう。「信仰」が徳目となって、「信仰」という「功績」によって「義」とせられるのでは決してない。アブラハムの歩みをつらつらと観るならば、

「初めに神の恩恵ありき」

である。恵み深き主が彼に現われ、語りかけ給うというその事が既に大なる恩恵でなくて何であろうか。しかも、御言の内容は、人の思いを絶した驚くべきものであった。余りにも大きすぎて直ちには消化しきれぬほどであった。自分の身の上を直視するならば到底信じ難い内実のものであった。創世記 15 章 6 節にいたって遂に、アブラムは、全存在的な「アーメン」をもつて主に答えたのである。恩恵が恩恵として百パーセントに受けとられたのである。そしてこの日、主はアブラムと契約を結ばれるのである (15・7・20)。われわれにとっては、恩恵の中の恩恵は主キリストの十字架の愛である。十字架に極まった主の無限無量の愛である。

「我れ、汝を全く贖いたり。汝、わが愛に居れ」

と、十字架という事実をもつて今も語り給う主の愛である。この主の愛に圧倒されて私は生きている。

「わが愛する友よ、どうかこの愛を知り、この愛を受けとって下さい」

アーメン。



「エン・クリスト」33 号

歓喜と希望の福音 (講筈要旨)

1988 年 1 月発行

演題は「^{よろこび}歓喜と希望の福音」ですが、いったい今の世の中で、

「自分にはこんな素晴らしい喜びがある、こんな大希望がある」

と胸を張って言える人が幾人あるでしょうか。何がきても揺るがない喜び、希望、そんなものは見果てぬ夢でしょうか。暗い、不安定な世界だからこそ、いよいよ私達は、ほんものを求め、ほんものの中に生き、生かされたいと願うものです。

福音は文字通り「喜びのおとずれ」です。別の言葉でいえば、「解放」の福音といたい。人間を縛^{しば}っている様々の束縛からの解放です。ここでいう「解放」はしかし、政治的・社会的な次元での束縛からの解放ではなく、もつと深い意味で、即ち、人間が人間である限り誰しも免れることのできない暗闇の力からの解放を意味しています。死のおそれ、病いのおそれ、さらに内面的には自己自身の問題としての罪の意識や良心の呵責^{かしやく}、神の御旨^{みむね}にそむいているのではないかとの不安感、こうした外的・内的な苦しみのために、人は、あの幼な子の天真らんまんな喜びのすがたを失ってしまったのが現実です。死は人間にとって最も恐ろしい不気味な暗黒の力です。人はつとめてそれを忘れようとしします。しかし聖書によれば、キリストは死を滅ぼされたのです。

「彼(キリスト)は死をほろぼし、福音をもて生命^{いのち}と朽ちざる事とを明らかにし給えり」(テモテ後書 1・10)

また、キリストは自ら、

「我は復活^{よみがえり}なり生命^{いのち}なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠^{とこしえ}に死なざるべし」(ヨハネ 11・25～26)

と断言しておられます。現に主キリストは、死者ラザロを墓の中から復活させられたではありませんか。主の愛の力であり、キリストの中に充滿する生命力の勝利でありました。病いは時として死の前兆であります。病いの床に臥すとき、人は精神的にも参つてしまします。病いでなくても、老化ということは辛いことです。思うように手足が自由に動かず、もどかしい思いをいたします。寂しさを禁じえません。しかも、老いは誰もが迎えなければならぬ現実です。世の中で老年の問題が論じられるとき、大切な一つの事が見落とされています。パウロは叫んでいます。

「我らが外なる人は壊^{やぶ}れるれども、内なる人は日々新たに新たなり」(コリント後書 4・16)



と。そして、

「我らが受くる暫^{しば}くの軽き患難は、極めて大いなる永遠の重き光栄を得しむるなり」(コリント後書4・17)

と。この視点です。肉体の死(滅び)で終らない永遠の大生命。老化、病い、死という「暫くの軽き患難」の後に、復活の生命を賜わり、「極めて大いなる永遠の重き光栄」にあずかるという大希望、これを現実としてしっかりと受けとって生きることです。かの世界では、栄光のキリストが光の中に輝いて我らをお迎え下さる。そして、御自身の栄光のお姿に私達をも変貌させ、化せしめて下さるのです(ピリピ3・21、コロサイ3・4)。この御約束の聖言を信受し、その中に投身、托身して生きる者には、御言は受肉し、化体し、力となるのです。クリスチャンはこのことを実証する責任と光栄を賜^{たまわ}っています。

青年諸君の喜びは、希望は、生きがいは何でしょうか。志を立てても現実は失望と挫折に見舞われることが少なくありません。人間関係からくる悩みやストレスもあります。自分の内面の劣等感や、他人に対するねたみの心、他人を裁く心、そしてそういう自分が嫌になって落ち込むことがあります。他人と比較などせず、超然と「我が道を往く」強さが欲しい。自分の中にしつかりしたものを持たない切なる呻^{うめ}きがあります。

福音はほんとうの自由を得させてくれます。生命^{いのち}は自由の中でしか育ちません。クリスチャンの方々よ、あなたはほんとうの自由の中にありますか。律法にとらわれていませんか。生活の思い煩いにとらわれていませんか。あなたはキリストの絶大な御力^みを過少評価していませんか。

「信ずる者にはどんな事でもできる。神にはできない事はないのだ」

「何でも我が名によって祈りなさい。かなえてあげよう」

と主は約束して下さいたではありませんか。キリストの福音は常に無条件です。ただひたすら全存在的にキリストを信受し、主の中へ自分を投げかけてゆく者を、無条件に受けとって下さるのです。いと小さき者、見棄てられた存在に対してこそ、いよいよ熱くキリストの愛は注がれています。十字架で全き贖罪を果たし、「我」の全てを贖^いって下さったキリストの愛の力は、何ものにも勝^{まさ}って強い。この愛こそが私達の歓喜と希望の源泉です



「エン・クリスト」第 35 号 創世記 (第 5 回)
アブラハムの生涯 (2)

1988 年 7 月発行

今回学ぶところは、第 16 章～第 18 章 21 節および第 21 章 1～21 節です。前回とのつながりを理解するために、もう一度、第 15 章からみて下さい。

さて、神は先にアブラムに対して、

「お前の身から出る者がお前の嗣子^{あとつぎ}となるべきだ」

と仰せられ、さらに、

「お前の子孫は天の星のように無数にふえひろがるのだ」 (創 15・4～5)

とおっしゃった。ところが、その後も依然^{いぜん}として妻サライには子供が生まれなかった。そこでサライはアブラムに言った、

「主はわたしに子供を授けてくださいません。どうぞ、わたしのつかえめ (女奴隷) のところに入ってください。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません」

アブラムはサライの願いを聞き入れたので、サライは、エジプト人で名をハガルというつかえめを夫アブラムに妻 (側女^{そばめ}) として与えた。これはアブラムがカナン^{かなん}の地に住んでから十年後のことであつた (創 16・1～3)。アブラムはハガルのところに入り、彼女は身ごもつた。ところが、自分が身ごもつたのを知ると、彼女は女主人を軽んじた。サライはたまらなくなつてアブラムに言った、

「わたしが受けた害は貴方の責任です。……どうか主が貴方とわたしの間をお

裁きになるように」 (創 16・4～5)

もとはといえばサライの提案にアブラムは従つたままである。ところが事態は思わぬ方向に展開し、アブラムとサライの夫婦の絆^{きずな}に裂け目が生じかけてきた。サライからすれば、夫がハガルの意のままになり、ハガルを甘やかし、増長させているのは我慢がならないところであろう。アブラムはサライに言った。

「ハガルはあなたのつかえめだ。あなたにまかせるから、好きなように扱うが

よい」

サライは彼女につらく当たつたので、彼女はサライの顔を避けて逃げた (創 16・6)。ハガルはこうして女主人のもとを逃れ、エジプトへの道をたどつて荒野にある泉のほとりにやつて来た。その所で主の使がハガルに現われ、彼女をさとし励ます。すなわち、ハガルに

「女主人のもとに帰つて、その手に身を任せる」



べきこと、しかし同時に、ハガルを神様は見棄て給わない。それどころか、

「大いにその子孫を増して数えきれないほどに多くなさる」

こと、ハガルの身ごもっている子は男の子であつて、生まれたなら「イシマエル(神聴き給う)」と名付けるべきこと、主は彼女の苦しみを聴き給うたこと、などを告げたのである(創 16・7～12)。

このときのハガルの喜びはどんなであつたろう。荒野をさすらう彼女の心は、荒野のようになびく孤独であつた。希望が失せていた。そんな彼女に主が現われ、ねんごろに語りかけ、慰め、励まし、さらに大いなる祝福の約束を賜つたのである。苦しみを知り給う神、心の叫びに聴いて下さる神、決して見棄て給わぬ神! ハガルの心に熱いものが湧き溢れた。彼女は自分に語りかけられた主の御名を呼んで

「貴神こそエル・ロイ(わたしを顧みられる神)です」(創 16・13)

と言った。サライのところへ帰つたハガルは、従順に女主人に仕えたことであろう。荒野で主にまみえた彼女は、内的に新しくされ、人間的なわだかまりを乗り越えて心からサライに仕えたにちがいない。

時満ちてハガルはアブラムに男の子を産んだ。アブラムはその子の名をイシマエルと名づけた。ハガルがイシマエルを産んだ時、アブラムは 86 歳であつた(創 16・15～16)。それから 13 年が経つた。この 13 年間のことは聖書には何も記されていない。イシマエルは 13 歳の少年に成長している。アブラムはもう 99 歳、サラは 89 歳である。主はアブラムに現われて言われた、

「我は全能の神なり、汝わが前に歩みて完全かれ!」

と。また、

「もうお前の名はアブラムというな、お前の名をアブラハム(多くの人の父)と呼びなさい。お前を多くの国民の父とするのだから」

と。ここで、神は改めてアブラハムと契約を立て、彼および彼の後の代々の子孫のための永遠の契約とされるのである。そしてこの契約のしるしとして割礼(男子の包皮の部分を取り除くこと)を命じられた(創 17・1～14)。

神はまたアブラハムに、妻サライの名をサラと改めるように命じられ、

「彼女によつてお前に一人の男の子を授けよう。彼女を祝福し、彼女を国々の民の母としよう」

と約束された。アブラハムはこれを聞いて、ひれ伏して笑い、心の中で言った、

「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなつて、どうして産むことができるのか」

そして彼は神に言った。

「どうかイシマエルが貴神の前に生きながらえますように」(創 17・15～18)



これまで神を信じ、神に従順に従ってきたアブラハムであった。神様を信ずる気持ちに変りはない。このたび、久しき年月の後に再び神は現われて親しく語り給うた。有難い素晴らしい祝福に満ちたお言葉である。けれども、

「サラとの間に男の子を授けよう」

と仰せになるお言葉に対しては、もはや素直に

「ハイ、有難くお受け申し上げます」

とは言えないアブラハムであった。ほかの事ならともかく、事、子供のことに關しては、

「もうよろしうございます。既にイシマエルを賜っておりますから、彼を祝福し、世嗣^{よつ}ぎとして下さいませ、それ以上に私やサラの身に関して御心^みを煩^{わづら}わし給いませぬように」

と言っているように私には受けとれるのだ。けれども、そんなアブラハムの思い（不信仰ともいえる）を問題とせずに、神は言われた、

「お前の妻サラはお前に男の子を産む。その子の名をイサク（彼は笑う）と名づけなさい。……また、イシマエルについてのお前の願いもかなえよう。彼を祝福して多くの子孫を得させ、大いに子孫を増そう。イシマエルは十二人の君たちを産む」（創17・19～20）

第18章では、三人の旅人がアブラハムの天幕を訪れる。一人は主御自身であり、他の二人は主の使いであった。アブラハムは心からこの旅人をもてなす。彼らはアブラハムに、

「来年の春、貴方の妻サラには男の子が生れているでしょう」

と言った。これを後方で聞いていたサラは心の中で笑って言った、

「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか」

これに対して主はアブラハムに言われた。

「どうしてサラはそんなことを言うのか。主にとって不可能なことがあるうか。

……」

これを聞いたサラは恐れて、前言を打ち消し、

「わたしは笑いません」

主は、

「いや、あなたは笑った」

という楽しいやりとりが描き出されている。そして、第21章では、先の神の御告げどおりサラは身ごもり、アブラハムに男の子を産む。アブラハムはその子の名をイサクと名づけた。そして八日目にイサクに割礼を施した。サラは言った。

「神はわたしを笑わせてくださった。聞く者は皆、わたしと笑い（イサク）を共にしてくれるでしょう」（創21・1～6）



以上が今回の部分の概要である。以下に私の感想を記してみよう。

サライが夫アブラムにハガルを側女そばめとして与えたことは、結果的には失敗であった。神の御旨みむねではなかった。けれども、誰がサライを責めることができようか。夫妻は神の約束を信じて十年近くも待ったのである。サライの胎は既に閉じていた。

「このまま齢よわいを重ねていけば、遂に夫アブラムは子供を持ち得ないで終るだろう。そうすれば、神の約束は成就しなくなってしまう。神は、『アブラムの嗣子あとつぎは、アブラムの身から出る者』だとおっしゃったが、『サライの胎から生まれる者』とは言っておられない。夫は今まで忍耐してくれていた。もし私が夫を愛し、夫のことを思うなら、たとえ辛いことであっても、ハガルを夫に与えて、彼女によつて世嗣よきつぎをもうけよう」

と。サライはこのように考えたのではなからうか。そしてアブラムもサライの提案を受け入れたのである。サライが不信仰として責められるのであれば、アブラムも同じことである。ともあれ、サライのはからいは「人間的なはからい」であつて神の御計画ではなかった。神の御思みいは人間の思おもいはるかに超えている。

「エホバ宣のたま給く、わが思おもいは汝らの思おもいと異なり、わが道は汝らの道と異なり。天の地よりも高きがごとく、わが道は汝らの道よりも高く、わが思おもいは汝らの思おもいよりも高し」(イザヤ 55・8～9)

とあるとおりである。そして、サライの「人間的なはからい」のもたらしたものは、サライにも、アブラムにも、そしてハガルにとつても辛いこととなつた。これを思うとき、われわれは身につまされる思おもいがある。いつも「人間的なはからい」で行動し、主の御心を痛めているのではなからうか、どうすれば、常に主の御意に従つて、道を誤ることなく歩み抜くことができるのだろうか、と心配になる。

しかし、恐るるなかれ！ 主キリストはいつも私達のかたえにいて下さるのだ。

「汝ら心を騒さわすな、神を信じ、また我を信ぜよ」(ヨハネ 14・1)

と。神はアブラム夫妻の失敗をお責めにならなかつた。サライに苦しめられて荒野へ逃げたハガルを顧かえりみ、ハガルを護り給うた。のみならず、アブラムの願いに答えて、イシマエルを祝福し、その子孫の繁栄を約束された。神は、サライやアブラムの失敗をも包んで下さっているのである。人の選んだ道が神の御意みこころにそわなかつた場合でも、神は最善の道を備えていて下さるのである。

私たちは時として、左すべきか右すべきか、まどい、悩み、苦しむことがある。祈り求めれば、いつも明確な答えを直接に神様からいただける、というわけのものではない。「それは、祈りが足りないからだ。答えをいただくまで祈りつづけるべきだ」と言える人はまことにさいわいな人だと思う。私も祈り求めること、祈りつづけることの大切さを少しも否定しない。しかし同時に、次のことを言いたいのだ。



私たちが真摯^{しんし}に考え、御意を求め、祈り心をもって

「この道を往^いこう」

「これを選びとろう」

と心に定め、行動するとき、たとえそれが神の御計画とは異なることであつたとしても、そのことの故をもつて神は私たちを断罪し給わない。主は私たちの誤ちをも包み、万事を益とならしめ給うのである (ロマ 8・27、28)。神は心の大きな方である。人間の弱さの故に道を誤つたとしても、主はゆるしてあり給う。誤ちに気付いたときは、

「主様、申し訳^ございませんでした」

と碎けの心で、ひれ伏して主のゆるしを求めるならば、主は決して私たちを罪に定め給わない。私たちは、

「人を奴隷として再び恐れに陥^{おとし}れる霊ではなく、神の子とする霊」

を受けたのである (ロマ 8・15)。

さて、神がアブラハム＝サラ夫妻に賜つた約束の子イサクは、まさに神の御業^{みわざ}の実であつて、人の思いや力の及ばぬところで与えられた「恵みの子」であり「賜^{たま}りたる子」であつた。アブラハムもサラも自分達の間に子供を授かることには絶望していたといつてよい。

「今より後、アブラムでなくアブラハムだ。サライはサラと呼ぶのだ」

と神様がおつしやつてもアブラハムもサラも「子供を与える」との御言葉をすぐには受け入れることができなかった。いいかえれば不信仰^{ふしやう}だつた。けれども、神はアブラハムやサラのそうした思いを問題とはなさらずに、断然、御自身の意志を、聖なる御計画を成就^{めぐみ}なさつた。人間の側の主観的な信仰・不信仰など問題にしておられない。いわば恩恵^{めぐみ}が圧倒してしまつたのだ。アブラハムもサラも遂に信ぜしめられた。

「降参しました。アーメン、ハレルヤです！」

と喜びの笑い声を発したことだろう。まことの信仰とは、このように神によつて信ぜしめられる、その意味で神の業^{わざ}、人間の中になし給う「神の業」なのである。だから揺るがない。大安心なのだ。

ところで、アブラハムに対する永遠の契約のしるしとして、神は割礼を命じられた。それ以来、割礼はユダヤ民族 (神の民) にとっては選民たるの証であり、割礼なき者は民の中から絶たれねばならなかつた。肉体に施す割礼、それは神の恩恵を体に刻み込むことであつた。しかし、その本義は「心の割礼」であり「霊の割礼」であるべきことを預言者エレミヤは叫んだ (エレミヤ 4・4、9・25、26)。すなわち、己れ自身が碎かれること、「我」が碎かれることだ。主キリストの十字架がこれを賜る。十字架で主御自身が碎け給うた。その「碎け」によつて、私たちは碎かれた。主の十字架の「碎け」は、わが「碎け」となり、そしてその「碎け」の場に主の御霊^{みたま}、聖霊が臨み給う。この「聖霊の証印」こそがまことの割礼、霊の割礼であり、神の民、キリストの民たることの保証である (エペソ 1・13、14)。



最後に、イサクとその子孫は神の選びの民の正統であり、本流である。約束の子である。ハガルの子イシマエルとその子孫は、約束の外にあり、傍流でしかない。もともと「人間的なばかり」の生み出した予定外の作品なのだから。しかし、私はそうは思わない。「人間的なばかり」の結果であつたとしても、それも最初から神の御計画の中にあつたのではあるまいか。神の御旨は大きい。^{みむね}神は大肯定の神である。イサクはなるほど正統だ、しかし、イシマエルも大いに栄えよ！ どの民族もそれぞれに栄えよ、百花繚乱^{りようらん}に咲き誇れ、とおっしゃっているのではないか。ハガルに対する顧み、イシマエルへの祝福の約束、そして、第 21 章におけるハガルとイシマエルに対する深い顧みと護り。福音書におけるキリストの、あのサマリヤ人（傍流の民）に対する暖い眼差^{まなざ}し、そして世に棄てられたる者、遊女や取税人などパリサイ人から白眼視されていた人達に対する深い慈愛の心。キリストにおいては本流も傍流もない。

「二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣^{なかがき}を取り除いて」（エペソ 2・14）

下さったのである。主キリストの聖名をたたえよう！



「エン・クリスト」第 35 号 創世記 (第 6 回)
アブラハムの生涯 (3)

1988 年 7 月発行

今回とりあげる第 22 章は、アブラハムの生涯における最大の試練の場面である。すなわち、アブラハムが神の命令に従って愛子イサクを犠牲として献げるくだりである。ここを読むとき、胸の痛む思いがするのは私だけではないであろう。現代の我々の感覚からすれば、この箇所は不可解というほかない。何故、神はアブラハムを試みられるのか。人格関係において「人を試みる」ということはあつてはならないことではないか。しかも試みの内容がひどい。義なる神、愛なる神が、人身御供として、イサクを燔祭（はんさい）（焼き尽くす献げ物）として捧げよと命ずるがごときは何たることか。もつとも、注解書によれば、古代の世界においては、子を犠牲として献げることは珍しいことではなかったという。それどころか、このような（悪しき）風習はかなり後代まで残ったという（例えば、士師記 11・29～39、列王記下 3・27、23・10、歴代下 28・3、33・6、エレミヤ書 7・31、19・5、エゼキエル書 16・20、20・26、20・31、等参照）。

人間的な理解からすれば、このような疑問が湧き、その意味で、いわば「躓き」の箇所ではあるが、心を鎮めてこの第 22 章に読み入ることにしよう。

「これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、『アブラハムよ』

と呼びかけ、彼が、『はい』と答えると、神は命じられた。

『あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行き

なさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を燔祭として捧げなさい』

次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を割り、二

人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った」（創

22・1～3）

神の呼びかけに応えてアブラハムが全存在を神に向けて聴いた神の命令は、全くわが耳を疑うほかないような苛酷な内容のものであった。この御言を聴いてから、翌朝早く出立するまでの間に、アブラハムの心の中にどのような葛藤（かつしやう）があつたのかは何も記されていない。何も記されていないことが、かえって彼の心の中の深い悩み、苦しみ、戦いを暗示しているように私には思える。あれほどの長年月の後に、永い忍耐の後に、神の約束の成就として賜（たま）った独り子イサク。イサクこそはアブラハム夫妻にとって神の祝福の具現であり、証明である。神を信じ抜いて歩み、神第一の生活を貫いてきたことの報いがこのイサクを賜ったことであり、その後のさいわいな日々であつた。そしてイサクは子孫の繁栄の基と



なるべき大切な存在なのである。このイサクを燔祭として献げよとは！

彼はしかしこの内なる苦しみを誰にも語らなかつた。サラにも、もちろん息子イサクにも。彼はただ一対一で神に向かった。神の命により、遠く離れたモリヤの山で燔祭を献げ、神を礼拝するのだとだけ告げて、翌朝早く彼は二人の若者とイサクを連れて出で立った。彼は神の命令に黙って従った。御言に従おうと決意したとき、彼は己れに死んだ。一切は神中心である。主なる神にのみ栄光を帰し奉るべきである。

「主は与え、主は奪う。主の御名は讃めたたえられよ」(ヨブ記 1・21)

とヨブが言ったように、彼は御言に従おうとした。そのとき不思議にも大いなる平安が彼を包んだ。彼は今や地上の望みを棄てたのである。イサクを献げることにおいて、彼は己れ自身を屠^{ほふ}り、己れ自身を献げた。彼はモリヤの山に向かつて黙々と歩を進めた。

「三日目になって、アブラハムが目を凝らすと、遠くにその場所が見えたので、アブラハムは若者に言った、『お前たちは、ろばと一緒にここで待っていていなさい。わたしと息子はあるそこへ行つて、礼拝をして、また戻ってくる』。アブラハムは燔祭に用いる薪を取つて、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。二人は一緒に歩いて行つた」(創 22・3～6)

今やアブラハムはイサクと二人つきりである。しかもイサクは何も知らない。父の命ずるままに薪を背に負つて父と一緒に山路を歩く。自分はこの子を屠るための刃物と火とを手に持っている。アブラハムは心の中でわが子に手を合わせ、

「イサクよ、父を許せよ」

と涙して詫^わびていたことであろう。

「わが全能の主、わたしの生涯を託して信じ従ってきたこの主の御命令なのだ。神はわが思いをはるかに超えたお方。わたしの全存在であつたお方。今、御旨^{みむね}を拒むことは私の全生涯、全人生に対する裏切りなのだ。神は全智全能のお方。神が今、これを求められるにはそれだけの深い道理^{ことわり}があるはず。今、私には深い御摂理^{せつり}はわからないけれども、後にお示し下さるであろう。神は常に最善を備えてあり給う。最善をなし給う。神は義なり、これを私は信ずる！」

と。新約のヘブル書記者はアブラハムの思いを次のように解している。

「アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです」(ヘブル書 11・19)

と。突然、イサクがアブラハムに呼びかけた。

『お父さん、火と薪はここにありますが、燔祭の小羊はどこにいますか？』
アブラハムは答えた。『わたしの子よ、燔祭の小羊はきつと神が備えてくださる。』二人は一緒に歩いて行つた」(創 22・7～8)

アブラハムは道すがら、ずっと神の御思いのことを深く思いめぐらしてここまでやって



来た。彼の心は、地上の思いを離れて今や天界にあった。だからイサクの突然の問いかけにも少しも動揺するところなく、このような答が彼の口から自然に出たのであった。

「神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使いが、『アブラハム、アブラハム』と呼びかけ……言った。『その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしに献げ^おることを惜しまなかつた。』

アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに燔祭として献げた。アブラハムはその場所をヤーウエ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。そこで、人々は今日でも『主の山に備えあり（イエラエ）』と言っている」（創 22・9～15）

私は、アブラハムにとつて、このイサク献供の体験は、信仰の完成であつたと思う。信仰は観念ではない。理論でもなければ、教義を信奉することでもない。神に自己を捧げきり、神の御意志に百パーセント従い抜くことである。自分を大切に保存した上で、都合のいいところだけを選びとつて受容するといった態度は、まことの信仰からはほど遠い。いわゆる「幸福」が約束されるから信ずる、或いは、信ずれば必ず「幸福」にならなければならない、というレベルにとどまつている限りは、ほんとうの世界には人れない。キリスト道はそんなものではない。

「人もし我に従^{きた}い来ら^{きた}んと思わば、己を棄て、日々おのが十字架を負いて我に従え。己が生命を救わんと思ふ者は之を失い、我がために己が生命を失うその人は之を救わん」（ルカ伝 9・23～25）

とキリストはおっしゃつた。そして主キリストは御自身を父なる神の御旨^{みむね}に完全にゆだねきり、献げきつた行き方をなさつた。その極みは、我ら罪びとのために、罪のあがないとして、罪なき聖き御身を献げたもうた十字架だつたのである。

神の御旨に従つて生きようとするとき、最大の障害物は「我執」である。自己愛である。神の前に己れを惜しむこと、我意をたてようとするものである。これを神は碎き給う。キリスト道は、「狭き門」から入り、「細き道」を歩ましめられる。しかし、これこそが生命に至る道である。

「狭き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者多し。生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出す者少し」（マタイ伝 7・13～14）



しかし、おそるるなかれ。主は「生命に至る門」となって道を拓いて下さった。十字架で私達の「旧き我」(エゴ)は裁かれ、碎かれた。手離しで己れを棄て切れぬ我ら煩惱熾盛の凡夫に代わってキリストが十字架上に己れを棄てて下さったとき、実は、我らも共にそこに棄てられてあるのだ。このことを観念ではなく、現実として受けとること——深い祈りの中で、

「我、主とともに十字架されてあり」

との霊的根源現実をハタと受けとること——その場でのみ死生の転換を我らは体験することが出来る。これを体得するとき、どのような試練に見舞われても我らは揺るがない。ただ、一切の事において聖なる御旨の成らんことを折り願うのみである。

神はアブラハムを信じ、彼を試みの炉で練られた。彼ならば必ず試練に耐えて、神一切の全き信の次元へと完成されることを信じておられたのだ。そして神は勝利されたのである。神の信にこたえたアブラハムこそ、まことに「信仰の父」と呼ばれるにふさわしい。



「エン・クリスト」36 号
愛の讃歌

1988 年 10 月発行

今年で第35回を迎えた夏の特別集会も、今回をもって終りとなった。思えば私が初めて参加したのは1960年の夏、伊香保における第7回の特別集会であった。それ以来、外国留学中（1962年・63年・78年）以外は、ことごとく参加した。どれも皆思い出深いものであるが、とりわけ鹿沢^{かざわ}高原および伊豆松崎でのそれは、自然の風光とともに私の胸中に深く刻み込まれている。

夏の特別集会は、まさに「特別」であった。各地から集う主にある兄弟姉妹達が、それぞれに、この夏の特別集会において、ある決定的な霊的突破（新生）を体験させられたことであつた。ちょうど全国の球児にとつての夏の甲子園大会のように、私達はこの夏の特別集会を一つの目標とし、これに照準を合わせて一年間の練磨の励みとした。夏の特別集会の大黒柱は何といつても小池先生であり、その力強く、深く高い重厚な内容の御講筵であつた。35回にわたる夏の特別集会を通して、先生は全聖書を語られたといつても過言ではなからう。近年はイザヤ書（第三、第二、第一）、黙示録。四福音書（マルコ、ルカ、マタイ、ヨハネ）を順次とりあげられ、内容的にも先生は、語るべきことはもう全部語つたよと、まことに特別集会の使命を立派に果たし終えられたように思う。これからは、私達は、これまでにならなかつたものを血となし肉となして、我々自身の足で立ち、新しい一步を踏み出すべき時（カイロス）が来たのである。各召団はそれぞれに、思いを一つにし、^{みことば}聖言と祈りに打ち込み、それぞれのカラーをもつて花を咲かせ実を結ぶべく励もう！ その意味で、終りは始めなのである。この新しい出発にあたって私は、コリント前書第13章を全召団の共通の絆^{きずな}としたい。これらは私たちの主が弟子たちとの別れにさいして遺して下さつた聖言と相照応するものだ。即ち、主は訣別にあたつて次のようにさとされた。

「われ新しき誠命^{いましめ}を汝らに与う、なんじら相愛^{あい}すべし。われ汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。互に相愛する事をせば、之によりて、人みな汝らの我が弟子たるを知らん」（ヨハネ13・34～35）

「父の我を愛し給いしがごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。……わが誠命^{まこと}は之なり、われ汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。人その友のために己^{おのれ}の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。」（ヨハネ15・9～13）

このような深い愛の尊さをパウロは次のように讃^{たた}えている。

「たとい我もろもろの国人^{くにびと}の言および御使^{みつかい}の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や



響く鏡鉞の如し。たといわれ預言する力あり、またすべての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。たとい我わが財産をことごとく施し、またわが体を焼かるるために渡すとも、愛なくば我に益なし。」(コリント前書13・1～3)

異言や預言の賜物、力ある業、山を移すほどの偉大なる信仰、これらはまことに素晴らしい。しかし、もしその人に愛がなければ、それらは空しい。これらよりもっと大切なもの、無くてはならないものは愛だよ、とパウロは確言している。異言や預言や力ある業等々は、聖霊の賜物(カリスマタ)であつて人によつてそれぞれである。これらは、

「すべて、同じ一つの御霊の活動にして、御霊その心にしたがいて各人に分け与う」

のである(コリント前書12・66)。これらは、神の国を築かんがため、そしてキリストの群れなるエクレシア(召団)を建て上げんがために上より賜わつた武器であり力である。しかし、力自体が何ものかではない。力を賜つた人が何ものかなのではない。力の源となる主御自身、御霊御自身を尊び崇めるべきである。人の側はどこまでも平伏しのすがたである。また、これらの賜物が自分に与えられていないからといって悲観してはならない。賜物は所詮、一時的であり、永遠のものではない。

「預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず。全き者の来るときは全からぬもの廃らん」(コリント前書13・8～10)

とある通りだ。これに対し、愛という恩恵(カリス)はすべての人に、無条件に与えられる最高のたまものである。このことは、小池先生が曠愛新書第1号『福音の心臓』24頁において明記しておられるところだ。御霊の本質は愛であり、この愛はこれを受容する人の人格全体に浸透し、その人の人格と一如になる。我らの主キリストは愛そのものなるお方。いまだかつて人類の知らなかったほんとうの愛をその全生涯をもつて、そして愛の極致たる十字架の贖いをもつて示して下さつたのである。だから我らも、この全き愛に貫かれて生きたい。

再びコリント前書13章の「愛の讃歌」に戻ろう。

「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行わず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念わず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。愛は長久までも絶ゆることなし。」(コリント前書13・4～8)

「愛は寛容にして慈悲あり」とは、何と慰め深い言だろうか。主の祈りに、

「我らに負い目ある者を我らの免したる如く、我らの負い目をも免し給え」(マタイ6・12)



とあるような、また、

「汝らもし人のあやまちを免さずば、汝らの天の父も汝らのあやまちを免し給

わじ」(マタイ6・14、15)

と主がさとされたように、人の罪は罪としてこれを厳しくしりぞけつつも、人を包み受け容れ、執り成し、主の前に共に祈るすがたでありたい。さらに、

「人の悪を念わず」

という言葉に注目しよう。これは、

「ひとの悪をことあげしない」(前掲『福音の心臓』44頁)

とか、

「人の悪事を数え立てない」(フランシスコ会聖書研究所の訳)

というのが原意のようだが、「人の悪を思わない」という心のあり方が根源であろう。我々は人間関係において、ことに相手が自分にとつて大切な人であればあるほど、ちよつとした誤解から相手の言動を悪く解釈しがちである。人の内面の深いところを理解することはほんとうに難しい。外的な現象や事態だけから速断することは危険なことだ。むしろ、善を信じ、善意を信じ、善き事を希つて主の御前に執り成し祈つてゆこう。主が道を拓いて下さるように、主がその人の上に最善を成して下さるように、主に委ね、主に祈ろう。この祈りを主は受け容れ、主がその人のことにつき全責任を負って下さるであらう。

「愛は凡そ事忍び、事信じ、事望み、事耐うるもの」

信じ抜き、望み抜き、荷い抜き、祈り抜きましよう。心を一つにして、

「聖国を来らせ給え」

の祈りに生きましよう。どうか全召団の上に主の豊かな祝福がありますように。アーメン。

